鳥取県西伯郡中山町八重方言における身体感覚を表すオノマトペ

室山　敏昭

○はじめに

1．対象地の地理的環境：鳥取県西伯郡中山町は、西部地方の中心地である米子市と中部地方の中心地である倉吉市のちょうど中間に位置し、東伯郡赤碕町に隣接する。八重集落は、ＪＲ山陰本線の中山口駅から南東へ約１５ｋｍほど入った山間の農業集落である。全体がやや窪地になっており、家屋は陽当たりのよい南斜面に密集して建っている。

2．対象地の社会的経済的環境：典型的な農業集落である。公民館・郵便局などの公共施設や病院・スーパーなどは、中山口駅の周辺に散在している。当該集落には、老人クラブの集会所があるだけである。

3．生業：主な産業は農業で、米作が中心である。長薯、葉煙草の栽培も行っている。戦前は、養蚕が盛んだったという。

4．交通：ＪＲ米子駅から列車の便が日に３３往復ある。また、国道９号線が整備されており、米子市へ出るのにきわめて便利である。したがって、当該集落の若者は、大半が米子市へ通勤しており、農業は専ら年寄りの仕事となっている。

5．人口：１９９１年１１月１日現在で、戸数が４５戸、人口が１７２人である。

6．調査年月日：１９９１年１１月１０日　午後２時５分～４時５５分。

7．方言話者：A．松本ユキ子　大正２年生（７８歳）
　　B．江原豊子　　大正９年生（７１歳）

8．調査場所：松本ユキ子氏宅。

9．調査方法：当該質問票に基づく質問調査法を主とし、適宜自然傍受法による調査も交えた。

Ⅰ　全身の感覚

Ⅰ－1　快不快

ウンウン　○カラダガ　イターテ　ウンウン　イットーナハー　ワ。体が痛くて、ウンウン言ってなさるよ。

ウンコラウンコラ　ウンウンの強調形。主として、中年層以上の男女が使う。

サッパリ　○フロニ　ハイッテ　アシェー　ナガイタケン　サッパリ　シタ　ガヤー。風呂に入って汗を流したから、サッパリしたよねえ。

Ⅰ－2　寒さ

ガタガタ　○ガイニ　サムイケン　カラダガ　ガタガタ　フルエー　ワー。大層寒いから、からだがガタガタ震えるよ。

ガタガタガタガタ　ガタガタの強調形。

ゾット

ゾーット　ゾットが瞬間的な感覚を表すのに対して、この語はそれより長い時間にわたって、連続的に感じる感覚を表す場合にもちいる。○ゾーットワ　オジェートキニモ　ユー　ナー。ゾーットは恐ろしい時にも言うねえ。　ゾット・ゾーットは、身体感覚だけでなく、心情を表す場合にも使い、明らかに同音異義語として用いられる。その意味で、オノマトペにも恣意性が認められるとしなければならない。

スースー　○シェナガ　スースー　スー　ナー。背中がスースーするねえ。スースーは、背中の部位感覚として用いられることが多いという。

スカスカ　スースーと同義だが、方言形の意識が強く、フォーマルな場面ではあまり用いないという。

ゾクゾク

ゾクゾクゾクゾク　ゾクゾクの強調形。単位形（この場合はゾクである）の四回反復形は、二回反復形の強調形となり、程度性がより大であることを表す。

ゾンゾン　○キョーワ　エライ　ゾンゾン　スー　ナー。今日は大層ゾンゾンするねえ。　方言形の意識が明確である。

ジンジン　ゾンゾンよりもさらに寒い時に使う。雪が降る前の凍てつくような寒さを感じる時に使うという。○アシタワ　ユキガ　フーダラー　ジェ。カラダガ　ジンジン　スー　ガ。明日は雪が降るのだろうよ。からだがジンジンするよ。

Ⅰ－3　暖かさ・温かさ

ホカホカ　○カイロー　ツケルト　カラダガ　ホカホカ　シテ　ヌクイ　ワナー。懐炉をつけるとからだがホカホカして温かいわねえ。　身体の内部感覚を表す。

ポカポカ　陽気について使う事が多く、身体感覚にはあまりつかわない。身体感覚を表す場合は、ホカホカよりも程度性が強い。／h／：／p／の対立が、程度普通対程度大という意味上の対立と対応する。

Ⅰ－4　暑さ・熱さ

カット　○サムイ　トキニ　サケ　ノムト　カラダガ　カット　シマス。寒い時に酒を飲むと、からだがカットします。　カットは、ひどい怒りを覚えて冷静さを失う場合にも使う。身体感覚と心情との共通感覚を表すとみなすことができる。

カッカ　真夏の強い日ざしを全身に感じる時。また、炭火がおこる時の様子を表す場合にも使う。

Ⅱ　皮膚の感覚

ヒリヒリ　日焼けや火傷などをした時の痛みの感覚を表す。

ピリピリ　ヒリヒリの強調形。ホカホカ：ポカポカと同様の関係である。○キンニョー　ヤケド　シタダケン　ピリピリ　シテ　カナワン。昨日火傷したから、ピリピリしてたまらない。

ベタベタ　全身に汗をかいたり水に濡れたりして、シャツなどがからだにピッタリくっついた不快感覚を表す。

ベッタリ　○カラダジュー　ベッタリ　アシェ　カイタ。からだ全体にベッタリ汗

をかいた。

ベッショリ　ベッタリと同義だが、方言形という意識が強く、主に中年層以上の男女が使う。若年層は、普通ビッショリを使うという。

ムズムズ　虫などがはった時に感じるむずがゆい感覚を表す。

ムズムズムズムズ　ムズムズの強調形。胴体の部位感覚を表すことが多い。

カサカサ　肌にあぶら気がなく、かわいた様を表す。

ガサガサ　○ワシノ　テオ　ミテ　ミナハレ。ガサガサダー。私の手を見てみなさい。ガサガサだ。　カサカサの強調形。

スベスベ　カサカサの対義語。共通語意識が強い。

ツルツル

ツルンツルン　○オマエノ　テワ　ツルンツルン　シトル　ナー。あなたの手はツルンツルンしてるねえ。

ズキズキ　間断なく感じる痛みの感覚。

ズキンズキン　ズキズキの強調形。響くような痛みの感覚を表す。

ズッキンズッキン　ズキンズキンよりもさらに痛みのひどい場合に使う。これらの3語は、肌に感じる痛みよりも、頭・歯・胃などが間断なく痛む場合に使うことが多いという。

ズキリズキリ　特に、腫れ物が痛む場合に使う。古いことばで、中年以下は用いない。

ズキット　瞬間的に感じる痛みの感覚を表す。「単位形＋ト」の形態は、一般に瞬間的な感覚を表し、単位形の反復形態（二回反復形、四回反復形）は間断なく続く連続的な感覚を表す。また、四回反復形は二回反復形の強調形となる。これを仮に、D（4U＞2U）と表示することにすれば、「単位形＋ト」と二回反復形、四回反復形における感覚の連続性の差異は、T（4U＞2U＞U＋ト）と表示することができよう。〔ただし、Dはｄｅｇｒｅｅ：Tはｔｉｍｅの頭文字〕

ジリジリ　ズキンズキンとほぼ同程度の痛みを表す。主に、老年層が使うという。

○カイスイヨクエ　イッタ　アトナンゾ　ハダガ　ヤケルヤーニ　ジリジリ　スーダケン。海水浴に行った後など肌が焼けるようにジリジリするから。

チクット　針や刺が刺さった時の瞬間的な痛みの感覚。

チカット　この語の方を、よく用いる。

チクチク　針や刺などが刺さった後に、しばらく反復的に続く痛みの感覚を表す。T（U＋ト）は一回的、T（2U）は反復的という対立関係も認められる。

Ⅲ　頭部の感覚

Ⅲ－1　頭

ガンガン　○アトゴロ　カジェ　ヒーテ　ナー。アタマガ　ガンガン　ワレルヤーナッタ。先日風邪をひいてねえ。頭がガンガン割れるようだった。　ガンガンは／ｇｗａＮｇｗａＮ／と発音されることが多い。

ゴンゴン　ガンガンと同義。方言形という意識が強い。「ガンガン」「ゴンゴン」

は、頭痛に限って用いられる。

ズキット　二日酔いなどで頭が痛むことを表す。

ズキズキ

ズキズキズキズキ　ズキズキの強調形。また、痛みが間断なく続くことを表す。

ズキンズキン　ズキズキの強調形。単位形が2音節の場合は四回反復形が認められるが、単位形が3音節の場合は二回反復形しか出現しない。音節数があまりにも多くなるため、制約が働いていると考えられる。これを、「オノマトペにおける音節制限の原理」と呼ぶことにする。

ズッキンズッキン　ズキンズキンよりもさらに程度が大。／Q／が、強調の意味を担う。

ズクズク　古いことば。○ワケー　シュワ　アンマリ　ツカワン　ナー。若い人はあまり使わないねえ。

ズクズクズクズク　ズクズクの強調形。○トッショリガ　ツカウダケダー。年寄りが使うだけだ。

Ⅲ－2　顔面

カット　○ハズカシー　トキャー　カオガ　カット　ナッタツー　ナー。恥ずかしい時は顔がカッとなっと言うねえ。　この場合は「カット　ナル」を用いて、「カット　スル」とは言わない。

カーット　カットの強調形。

カッカ　○ノボシェテ　カオガ　カッカ　スー　ガ。のぼせて顔がカッカするよ。

カッカカッカ　カッカの強調形。○アゲナ　トキワ　ダーデモ　ハズカシーダケン　カオガ　カッカカッカ　シマス　ワネー。あんな時（人前で話をする時）は誰でも恥ずかしいから、顔がカッカカッカしますわねえ。

Ⅲ－3　目

チカチカ　光線などの刺激が強すぎて、目が断続的に痛むことを表す。

チカチカチカチカ　チカチカの強調形。○ツカゴー　メガ　ワルンナッテ　チカチカチカチカ　スーダケン。近頃、目が悪くなってチカチカチカチカするから。

コロコロ　目に小さな塵が入った時の痛みの感覚を表す。

ゴロゴロ　コロコロよりも痛みの程度が大。

ヒリヒリ　○メグスリ　サスト　メガ　ヒリヒリ　スー　ナー。目薬を差すと、めがヒリヒリするねえ。

ヒリヒリヒリヒリ　ヒリヒリの強調形。

Ⅲ－4　耳

ジーント　耳鳴りがする時に使う。

ジンジン　○ミミガ　ジンジン　ユーケン。耳がジンジン鳴るから。

ジャンジャン　ジンジンよりも程度が大。○ユンベ　ミミガ　ジャンジャン　ナッテ　ネラレザッタ。昨夜、耳がジャンジャン鳴って寝られなかった。

Ⅲ－5　鼻

ムズムズ　鼻の中がむずがゆくて、今にもくしゃみが出そうな感覚を表す。

ムズムズムズムズ　○ハナン　ナカガ　ムズムズムズムズ　スー　ナー。鼻の中がムズムズムズムズするねえ。　ムズムズの強調形。

ツーント　○サシミニ　ワサビー　ツケスギルト　ハナオ　ツーント　ツクヤーナケン　ナー。刺身に山葵をつけすぎると、鼻をツーンとつくようだからねえ。

ツント　普通、ツーントを使い、ツントはほとんど言わない。共通語という意識が強い。

Ⅲ－6－0　口

Ⅲ－6－1　全体

ネバネバ　○クチン　ナカガ　ネバネバ　シテ　イケン　ダーガ。口の中がネバネバしていけないわね。

ネバネバネバネバ　ネバネバの強調形。

ネチャネチャ　粘り気のあるものを食べる時の感覚を表す。

ニチャニチャ　ネチャネチャと同義だが、この語の方をよくつかう。○アメナンゾタベート　ハニ　クッツイテ　ニチャニチャ　スーケン　ナー。飴などを食べると、歯にくっついてニチャニチャするからねえ。

ネチャリネチャリ　老年層しか使わないという。

ニチャリニチャリ　ニチャニチャよりも粘り気の程度が強い場合に使う。

Ⅲ－6－2　舌

ヒリヒリ　○コショーガ　キキスギテ　シタガ　ヒリヒリ　スーガ　ヤー。こしょうがききすぎて、舌がヒリヒリするがねえ。

ヒリヒリヒリヒリ　熱いお茶を飲んで、軽い炎症を起こした時の感覚を表す。

ピリピリ　ヒリヒリの強調形。また、極度の緊張で神経が異様に敏感になっていることも表す。

ピリピリピリピリ　ピリピリの強調形。

Ⅲ－6－3　歯

ガチガチ　寒い時の感覚を表す。

ガチガチガチガチ　ガチガチの強調形。また、間断なく続く感覚を表す。

ズキズキ　虫歯が痛む時の感覚を表す。

ズキズキズキズキ　○ムシバガ　ズキズキズキズキ　ウズイテ　ネラレザッタ　デー。虫歯がズキズキズキズキ疼いて寝られなかったよ。

ズキンズキン　ズキズキよりも程度のひどい時の感覚を表す。

ズッキンズッキン　ズキンズキンよりもさらに程度のひどい時の感覚を表す。○ムシバガ　ズッキンズッキン　ウズイテ　アタマニ　ヒビクケン。虫歯がズッキンズッキン疼いて頭にひびくから。

ピリット　虫歯が瞬間的に痛む感覚を現す。○ムシバガ　ピリット　ハシル。虫歯がピリット痛む。

Ⅲ－7　喉

カラカラ

イガイガ　○タケノコー　ヨー　イガカダッタケン　ノドガ　イガイガ　スー。筍をよくゆでなかったから、喉がイガイガする。

ジェージェー　○カジェ　ヒーテ　ノドガ　ジェージェー　ユー。風邪をひいて喉がジェージェーいう。

Ⅳ　胴体の感覚

Ⅳ－1　肩

ズキット　瞬間的な痛みの感覚を表す。

ズキズキ　連続的な痛みの感覚を表す。肩については、四回反復形を使うことはきわめて少ない。

ズキンズキン　ズキズキよりも程度が大。

ズッキンズッキン　ズキンズキンよりもさらに程度が大。／N／、／Q／の音感が程度性の著しさと結合することは、「ドキドキ」＞「ドキンドキン」、「ガチャガチャ」＞「ガチャンガチャン」のように、共通語にも認められる事実である。方言においても、普遍的に指摘しうることである。

Ⅳ－2　胸

チクチク　後悔の念などで、胸が痛むことを表す。共通語という意識が強い。この「チクチク」は、もともと触覚を表すものが、心理的・感情的な様態を叙述する用法に拡大されたものである。

チリチリ　極度に緊張した時の感覚を表す。

チリチリチリチリ　○シェンシェーガ　イロンナ　コトー　キキナハーダケン　チリチリチリチリ　シトーマス　ジェ。先生がいろんなことを聞きなさるから、チリチリチリチリしていますよ。　チリチリよりも緊張の程度が大。

シューント　悲しい思いや情けない思いをした時。

Ⅳ－3　腹

ゴロゴロ　急に下痢などをもよおした時。

ゴロゴロゴロゴロ　ゴロゴロよりも程度が大。

パンパン　満腹になった時の感覚。「パンパンニ」も使う。○ハラガ　パンパンニナッテ　イゴケン　ワネ。腹がパンパンニなって動けないわね。

ダブダブ　水などの飲料水を飲みすぎたことを表す。ズボンなどが大きすぎてすきまがある様を言う時は、ダブダブというアクセントになる。アクセントの違いによって、意味が弁別される。

グーグー　空腹の時。

グーグーグーグー　グーグーよりも空腹の程度がはなはだしいことを表す。

Ⅳ－4　胃

シクシク

ジクジク　シクシクよりも痛みの程度が強いことを表す。

ズキズキ　ジクジクよりも痛みの程度が強いことを表す。

ズキンズキン　○ツカゴー　イガ　ズキンズキン　ウズク　ダー。近頃、胃がズキンズキン　疼くよ。

ズキリズキリ　ズキンズキンと同程度の痛みを表すが、老年層しか使わない。

ズクズク　ジクジクよりも、この語の方をよく用いる。

ズクリズクリ　○サキノ　コトー　カンガエート　イガ　ズクリズクリ　ウズイテナー。将来のことを考えると、胃がズクリズクリ疼いてねえ。

Ⅳ－5　尻

モゾモゾ　虫などがはった時に感じる感覚を表す。

モゾモゾモゾモゾ　モゾモゾの強調形。

ムズムズ　モゾモゾと同義だが、山陰の雲伯方言においては、／u／>／o／の変化が、現在も中年層以上の発音にかなり盛んであるため、ムズムズはあまり聞かれない。○ムシガ　ハーテ　ムズムズ　スー　ワー。虫がはってムズムズするわ。

ムズムズムズムズ　ムズムズの強調形。

Ⅴ　手足の感覚

ブルブル　緊張感や寒さで手が震えることを表す。

ブルブルブルブル　ブルブルの強調形。○サブイケー　テガ　ブルブルブルブル　フルエマス　ダーデ。寒いから手がブルブルブルブル震えますわね。

スベスベ　手足が滑らかな様を表す。

カサカサ　手があぶらっ気がなくてかわいている様。

ガサガサ　カサカサよりも程度が大。○ナゲーコト　ヒャクショー　ヤッチョーマスダケン　テガ　ガサガサ　シトーマス　ワネ。長く百姓をしていますから、手がガサガサしていますわね。

ザラザラ　スベスベの対義語。

ヌルヌル

ヌラヌラ　○サッキ　サカノ　シゴー　シタダケン　テガ　ヌラヌラ　シテ　キモチガ　ワリー。さっき魚の料理をしたから、手がヌラヌラして気持ちが悪い。

ヌルヌルと同義だが、あまり使わないという。

ガクガク　手足の震える感覚を表す。特に、膝について使うことが多い。

ガクガクガクガク　○キョー　フサシブリニ　ヤマー　ハイッタラ　アシガ　ガクガクガクガク　シテ　ネー。今日久しぶりに山へ入ったら、足がガクガクガクガクしてねえ。

チリチリ　痺れの感覚。

Ⅵ　関節（骨）の感覚

ギクギク　○ヒザガ　ギクギク　スー。膝がギクギクする。

ガクガク　○サブーテ　サブーテ　ヒザガ　ガクガク　スー。寒くて寒くて膝がガクガクする。

ゴキゴキ　寝違えた時の感覚を表す。○クビガ　ゴキゴキッテー　ナー。首がゴキゴキというねえ。

ボキット　関節がたてる音。

ボキボキ　ボキットが一回的な音であるのに対して、ボキボキは二回以上の音について言う。

ポキポキ　ボキボキよりも軽い音の場合に使う。

以上が、八重方言の身体感覚を表すオノマトペの実態である。以下には、広島市白木町大字三田字下大椿方言のオノマトペと簡単な比較、検討を試みることにする。

①語彙量・・・八重方言の延べ語数は１２６語であって、下大椿方言よりも４７語多くなっている。その理由には、二つのことが考えられる。一つは、下大椿方言には、単位形の四回反復形が全く認められないのに対して、八重方言には１６語もの四回反復形が見られるという事実である。他の一つは、八重方言の話者が二人とも女性であるということである。八重方言の場合は、二人の女性が話し合って、次々に関連語形を教示してくれるケースが多かった。

②反復形について・・・八重方言には、単位形の四回反復形が１６語認められるが、四回反復形の単位形は、すべて２音節語であって、単位形が「ズキリ」のような３音節、「ウンコラ」のような４音節の場合は、二回反復形しか見られない。２音節の単位形の四回反復形は８音節となり、３音節の単位形の二回反復形は６音節、４音節の単位形の二回反復形は８音節となる。このことから、オノマトペの場合、語形を８音節以下に収めようとする方言話者の自然の意図が働いたことが推測される。その意図はおそらく、方言話者のリズム感覚からきているものであろう。「瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究」（『内海文化研究紀要』第４号、１９７６年）における各地のオノマトペを見ても、８音節が最も長い形態であり、この場合、２音節の単位形の四回反復形が基本となっている。したがって、この現象は、かなり普遍的な事実であると考えてよかろう。この現象を、今、仮に、「オノマトペにおける音節数制限の原則」と呼ぶことにする。

③下大椿方言においては、２音節の単位形の四回反復形を聴録することができなかったが、これをもって、ただちに地域差と結びつけることは危険であろう。なぜなら、先に挙げた「瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究」の中に、四回反復形がかなり多く見られるからである。ただ、八重方言の場合、筆者が意図的に四回反復形を誘導するということはしていないので、八重方言の方が四回反復形を多用する傾向が存する、と言うことができるかも知れない。

④全身と各部位の比率・・・これについては、二方言の関係は次の表のようになる。

	全　身	各部位
下大椿	35、3%	64．7%
八重	31．7%	68．3%

この表で見る限り、両方言の間には、特に有意差は認められないようである。また、「頭部」の比率は、下大椿方言が34．2%で、八重方言が36．5%であり、この点でも、ほとんど一致すると言ってよい。ちなみに、宮崎県延岡市南方方言の場合は、41．5%である。いずれにしても、各部位におけるオノマトペのうち、「頭部」に関するものが圧倒的に多くなっている事実が注目される。「頭部」には「口」「鼻」「目」「耳」など、味覚・嗅覚・視覚・聴覚に関する感覚器官があるが、「口」における「ヒリヒリ・ピリピリ」、「鼻」における「ツント・ツーント」などは、触覚を原感覚とするものである。身体感覚を表すオノマトペは、大半が原感覚である触覚を誘発要因とするものであるから、オノマトペの中でも最も基本的・原始的なものであると言ってよかろう。この問題に関しては、山梨正明の『認知科学選書17　比喩と理解』（東京大学出版会、1988年）、中村雄二郎の『問題群 ――哲学の贈りもの ――』（岩波新書、1988年）が示唆的である。

⑤快・不快の感覚と語彙量

下大椿方言における快感覚を表すオノマトペの比率は10．1%である。それに対して、八重方言の比率は5．6%である。したがって、延べ語数が多くなるのに比例して、不快の感覚を表すオノマトペの語数は多くなり（比率は高くなり）、その逆はありえないということになる。身体感覚について、日本人の認知は、異常・異様な感覚に極端なまでの焦点化がなされていることになる。これは、身体感覚が触覚という感覚を基本とするためであると解される。その意味で、身体感覚を表すオノマトペの研究は、共感覚、共通感覚の問題とも密接な関係を持つことになり、身体と精神を貫く問題（「チクチク・チリチリ」という触覚を原感覚とするオノマトペが心理・感情を叙述するあやとして用いられている）へ、言語の側から客観的にアプローチすることにもなるであろう。

（むろやまとしあき　広島大学文学部）